遺跡からのメッセージ（40）

文化遺産を今に活かす ⑧ 発掘調査から読み解く平安京

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

筆者が所属する考古学・民俗学専攻は、大学での専門的な学びを活かし、自治体等の文化財専門職員として活躍する卒業生が数多い。京都市の文化財保護課に勤務する家原圭太氏もその一人で、天理大学を2004年に卒業後、京都大学大学院に進んで学業の研鑽を積み、2007年、現在の職場に就職し、以来、京都市内の遺跡調査や文化財保護の業務に携わってきた。多忙な業務の傍ら、自らの専門的な研究も地道に継続し、『日本考古学』などの専門誌に意欲的な論文を発表する努力を重ねてきた。この8月、家原氏が考古学や歴史学の若手研究者に贈られる角田文衛古代学奨励賞の受賞者に決定したことは、専攻の教員にとっても大変嬉しいニュースだった。

同賞は、角田文衛博士が創立した古代学協会が、創立60周年を迎えるに当たり、2011年に創設したもので、今年がその8回目になる。戦後の考古学・歴史学の研究に多大な功績を残した角田博士の足跡と功績を永く顕彰し、後進による古代学の発展的な継承と振興の願いを込めて創設された同賞は、将来性を予感させる若手古代史研究者を支援するため、協会が季刊誌として刊行する『古代文化』の掲載論文から、秀作を選んで毎回1名を選出している。10月6日には授賞式と家原氏の記念講演が開催されるとの案内があり、私も足を運ばせてもらった。

写真１　京都文化博物館別館（重要文化財）

受賞式・講演会の会場となる京都文化博物館の別館は、地下鉄御池駅の南出口を出て、三条通を東に3分ほど歩いたところにある赤煉瓦の堂々とした建物だ。辰野金吾博士とその弟子・長野宇平治氏が設計したことで知られるこの建物（1906年竣工）は、それ自体が文化財で、明治洋風建築の傑作として1969年に重要文化財に指定されている。かつて日本銀行京都支店として使われていた建物が、移転のため一時使われず放置されていたのを、全国に募金を呼びかけ、1967年、財団法人古代学協会の施設「平安博物館」として再生させたのが、その文化的価値にいち早く気づいた角田博士だった。建物はその後、1988年、平安建都1200年記念事業の一環として開館した京都文化博物館に移管されて現在に至り、吹き抜けの大ホールはさまざまなイベント会場として多目的に活用されている。

別館の2階、講義室で始まった授賞式では、まず選考経過の説明があり、それによると、受賞の対象となった家原氏の論文「平安京の邸宅分布と園地」（『古代文化』第68巻第3号、2016年12月）は、平安京域における発掘調査成果を奈良時代以前のものも含めて集成・整理し、平安京の邸宅・園地の歴史的性格を解明した点が高い評価を受けたという。次いで、賞状と記念品の授与があり、花束が手渡された。天理大学時代の恩師・山本忠尚元教授から受賞を祝って届けられたその花束には、「平安京なら家原だと言われるようになってください」とのメッセージが添えられていた。

写真２　角田文衛古代学奨励賞を受賞した家原圭太氏

続く受賞者本人の挨拶では、平安京についての論文を他ならぬ古代学協会に評価されたことを感謝しながら、受賞論文の概要とその作成に至る背景が説明された。家原氏は、遺跡調査に従事する考古学者に方法論的思索を求めた角田博士の言葉を引きながら、発掘調査が日々進む平安京に限っても、蓄積された情報量は膨大で、それを古代律令国家の実像を明らかにする研究段階に昇華させる取り組みが不足していることを指摘する。その課題を克服する作業は大変な労力と根気が必要だが、それが研究者に求められているという。

「平安京の貴族邸宅を探る」と題した受賞記念講演会では、天理大学時代に遡り、自らの経歴や体験なども紹介された。大学2年生の夏休みには、島津製作所工場跡地（現イオンモール京都五条）で古代学協会が行った発掘調査に調査補助員として参加し、それが遺跡としての平安京との最初の出会いになったという。また、3年生の時には平安京右京の発掘調査にも参加し、飛鳥宮跡の正殿などの建築遺構を扱った卒業論文（「初期宮都中枢施設の性格」天理大学考古学・民俗学研究室『古事』第9冊、2005年）が、その後の研究の基礎となった。京都大学の大学院では山中敏史教授に学び、奈良文化財研究所に出入りして平城宮跡、藤原宮跡の発掘調査を体験した。京都市に就職してからは、8年間、埋蔵文化財の担当となり、年間100件を越える試掘調査等に携わった。そうした経験を踏まえ、これまで、古代都城や地方官衙に関わる研究を継続してきた。しかし、平安京の考古学的な研究は非常に困難で、家原氏が平安京に関する論文を書いたのは今回が初めてなのだという。

確かに、千年の都と言われる京都は、今も100万を越える人口をもつ大都市で、古代の平安京は、市街地の地下に遺跡として埋もれているばかりなのだ。広い面積の発掘調査が行われても、それは大規模な開発に伴う事前の調査で、平城京の長屋王邸跡がそうだったように、調査後は記録が保存されるのみで、多くの場合、遺跡そのものは残らない。また建物などの改築に伴う調査は小規模で、数多いながら情報は断片的だ。それらの情報を丁寧に読み解き、パズルのようにつなぎ合わせてゆく作業は、本当に気が遠くなりそうだ。今回の受賞論文は、貴族邸宅に設けられた園地という遺構を中心に、それらの情報を丹念に読み解いて検討し、律令国家による支配が平安京の都市計画と貴族邸宅の構造にどのような影響を与えたのかを明らかにしようとした意欲的な労作だといえる。

奈良時代以前の貴族邸宅、平安京の貴族邸宅、平安京の園地について具体的な事例に基づいて興味深く検討を行った90分の講演が終わると、会場からは惜しみない拍手が自然にわき上がった。家原氏の受賞を祝福するとともに、今後のいっそうの研究の進展と活躍を祈念したい。